

# 『五月の雨』

監督：富田玲央

出演：安川まり

2025年／日本／74分



公式サイト

2026年4月11日より  
新宿 K's cinema でロードショー  
自主上映も受付中  
©ちよつと待つ共同親権ネットワーク  
『五月の雨』製作委員会

## 社会を旅する シネマ

きつと もっと 近くなる  
きつと もっと 知りたくなる

ひと昔前、友人が夫からDVに遭っていた。身体的な暴力は基本無いが、些細なことで不愉快になり罵倒される。携帯の利用も行動範囲や交友関係も制限される。子どものためにも避難と離婚をと考え、証拠となる出来事を記録していくことに。だが彼女の手元に記録を残すのは危険なため、私に送ってもらい私が保管。彼女は送信履歴を削除する形をとった。その後、子どもと無事に逃げ、離婚も成立した。ただあのとき、証拠を残すリスクと、言外の圧を文字で伝える難しさに気づかされた。

2年前、共同親権に関する民法改正案が出たとき、彼女のことが思い浮かんだ。不思議なほど迅速にこの法案が通過したことへの違和感は大きかった。本作は共同親権が「前提」になることで、DVや虐待がある家族にどんな問題が引き起こされるかを、DV家庭の日常を再現した劇映画パート、被害者や弁護士へのインタビュー映像、国会答弁の映像と解説ナレーションなどから伝える作品だ。正直、最初はその特殊な構成に少し戸惑った。だが、被害者のプライバシーを守り、DVの恐怖のリアルを伝え、問題の論点をクリアにする、さまざまな「最善」を尽くした結果の形だとも思った。

DV被害当事者が密に関わってつくられた本作。特に劇映画パートから伝わってくるリアルは大きい。たとえば精神的DVの伝わらなさ。調停員の前では優しい顔が出る夫が「僕が外で働いているから、妻に家のことをきちんとやってもらいたいだ

## 2026年4月共同親権始まる DV家庭の懸念を今からでも

アーヤ藍

け」「妻は甘やかされて育ったから、少し厳しいだけで我慢できない」などと言うと、調停員は、妻が恐怖や不安を訴えてもDVとまでは判断しがたい。「誠実で優しくそうなご主人じゃないですか」と本作で調停員は妻に言い放つ。改正民法下でもDV等の事情がある場合は単独親権が適用になるが、DVの立証はどれくらい可能だろうか。そもそも調停員が「父親と母親の両方との時間が子どもにとって大切」という前提に立っていることも、目を曇らせることになるだろうと本作から感じたが、共同親権が通常となれば、その傾向は強まるだろう。

「親権」という言葉のDV家庭における危うさも本作は炙り出す。日常的に息子と会話をしている妻は、志望校について息子の希望を尊重するが、夫は「自分が息子を入れたい学校」を押しつける。支配的な構造が成り立っている中では「親権=子どもを思い通りにする権利」になってしまいかねない。本作で、離婚した夫が面会時に子どもへ凄惨な暴力を振るった実際の事件も取り上げられているが、果たして共同親権をめぐる議論において、子どもの権利と福祉は最上位に置かれてきただろうか。

来月、共同親権が始まる。良くも悪くも運用の余白が大きいと、同法案の懸念に対する社会の意識を高めることには今からでも意味があるはずだ。身の安全を守るため声を上げにくい当事者たちの思いが届くことを願う。



アーヤあい：映画探検家。慶應大学卒。在学中に訪れたシリアが帰国直後に内戦状態になったことが契機で、社会問題に関わる映画の配給宣伝を行うユニテッドピープル(株)に入社。取締役副社長も務める。現在は独立して映画イベントの企画運営や記事執筆等を行う。編著書に『世界を配給する人びと』(春眠舎)。

